

新年を迎えて

IFCCは活動開始して35年目を迎えることになりました。ここまで至ることが出来たことを、新年にあたり、皆様のご協賛ご協力の賜物と感謝申し上げます。

2020年から2021年と丸2年間、IFCCの歴史から“すっぽり”抜け落ちたような感じの時でした。ご挨拶を兼ねてのご報告にも、はたと考え込むような2年間でした。しかし、社会の歯車は営々と回って時が過ぎており、その渦中にいたことは否定しえません。

振りかえれば、それでも関係各位との協働でキューバ連帯やベトナムとの友好活動などに参画してきました。IFCCレターもIFCCの会報改題前の「国際青年」から数えて100号(IFCCの準備会時の1985年から発行)となりました。

2021年に協働してきました活動について以下ご報告し新年のご挨拶いたします。

日本キューバ連帯委員会 (CUBAPON) は

●キューバでの【強いられた通常戦争】に抗する闘いへの緊急支援活動が行われ、医療器具支援として820,000円を届けてきました。

〈自国でワクチンを生産し、医師、医療労働者の層の厚さは世界トップクラスのキューバですが、米国の経済封鎖による物不足が医療現場にも押し寄せ、コロナとの闘いが苦戦を強いられています。医療用品、特に注射器不足で速やかなワクチン接種に支障が出ています。経済封鎖の非人道性が改めて露わになったと言えます。7月11日に国内で起きた反政府の「抗議行動」も、コロナ禍により経済封鎖の影響が最大限に出ているところを狙った謀略との見方が有力です。メディアによる反キューバ宣伝も強まっており、米国は新たな「制裁」を課す動きも見せています。〉と緊急支援を呼び掛け実施されたものです。

●ドキュメンタリー映像「そしてイスラの土となる～日系キューバ移民の記録」を製作してきました。

〈歴史に翻弄されながらも、“革命”の地キューバに爪痕を残し懸命に生きてきた無名の日本人・日系人の生きざまを歴史に埋もれさせないため〉との呼掛けに多くの資金協賛を受け、2021年12月完成にいたしました。紙上をお借りして御礼申し上げます。

本レター裏面の「寄稿」は“強いられた通常戦争”下のキューバへの思いを残したく記した拙文から日本人移民たちへのシュプレヒコールの部分を引用転載したものです。ご高覧下さい。

NPO 日本ベトナム平和友好連絡会議 (JVPF) は

●北部ハザン省の少数民族寄宿中学校で40人に奨学金支援(180ドル×40人≒772,587円)が2021年1月実施されました。また南部ラムドン省の少数民族寄宿高校で30人に奨学金支援(450,000円 鹿児島JVPF主宰)が2021年3月実施されました。

●埼玉JVPFの事業で、クアンナム省の枯葉剤爆弾被貧困家庭10軒に『仁愛の家』(3,050,000円)が2021年8月寄贈されました。このクアンナム省での『仁愛の家』寄贈は都合50軒となっています。また北部ハザン省で『仁愛の家』2軒分、3億ドン(約1,400,000円)が2021年1月貧困家庭に届けられました。

IFCCの活動から花開いたそれぞれの活動ですが、コロナ禍にあっても人と人とのつながりが途絶えることなく続いています。(鎌田篤則)



2007年、現地で日系移民たちと出会った鈴木伊織さんがその後追い続け完成させた。この事業には故・日高邦夫さんの支えもあった。「イスラ」とはスペイン語で「島」の意味。写真はDVD版のジャケット。



埼玉JVPF実施のクアンナムでの『仁愛の家』寄贈47件目の模様が届いた。今回は生活支援の飼育牛も寄付された。



シュプレヒコール

COVID-19 禍における自宅療養者の増大について、作家の五木寛之氏がエッセーで「棄民だ。別の言い方をすれば、自助、となる」と書いていた。棄民という言葉を知るとキューバの日本人移民を思い浮かべる。日本が帝国主義列強として登場していく途中、及び第二次大戦後の1960年代までの「移民」という名の棄民政策を取り、中南米に多くの日本人を送り出してきた。

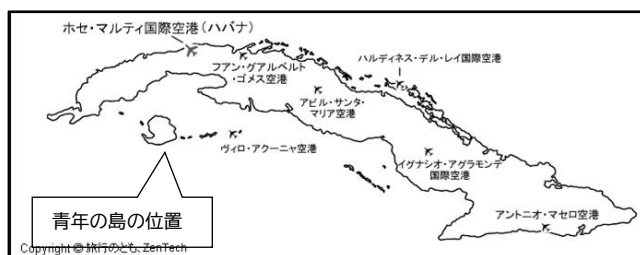
第一回芥川賞をとった石川達三の「蒼氓」(1935年発表)は、1930年、石川がブラジル移民として渡伯した時のことを描いたもので、石川は神戸の海外移民収容所で「国家が養い切れずに、仕方なしに外国へ奉公にやられる人々の悲しい現実」を目の当たりにして衝撃を受けた。彼は他の移民たちとともに45日間の船旅のうち「サント・アントニオ農場」にコロノ(契約移民)として入植し、1か月ほどで農場を去ってサンパウロに滞在、リオデジャネイロから北米を回って帰国した。石川は移民政策を棄民と糾弾し、収容所を「国家の無力を物語る国辱的建築物」と表現した。(出典:Wikipediaより)

筑豊の炭鉱労働者を坑内で働きながら見つめ続けた記録作家の上野英信(1923~87)が、沖縄の近代の庶民像を描いた『眉屋(まゆや)私記』(1984年出版)について、わたしはいきさつを忘れたが初版本を手に入れ新聞「青年の声」に寄稿したことがあった。眉屋私記は、20世紀初頭に現在の沖縄県名護市にいた山入端(やまのは)一族(屋号は眉屋)の6人きょうだいのうち、長男と三女の生涯を中心に記録した作品。長男は移民としてメキシコに渡り、三女は遊郭で仕込まれた三味線などの芸をいかして各地を転々とした。(この項、朝日新聞2020年10月7日より)

キューバ人へシュプレヒコールを考えた時、気になり今回改めてこの本を開いた。この本は第二次大戦後の米軍が沖縄の日本からの分離統治を宣言する1996年で終わっているが、上野は、メキシコからキューバへ流れていった移民たちのその後の跡を追いたい思いを死ぬまで語っていた。特に、71歳でキューバの「土となった」眉屋の長男の山入端萬栄の足跡をたどりたかったようだが、実現していない。

※注:山入端萬栄 1888年生まれ、1907年移民としてメキシコへ向かう。1916年キューバに渡る。1959年にハバナで没す。丁度、キューバ革命の年に没したことになる。その間、米国へ渡航もしているが43年間キューバに住み「キューバを第二の祖国」と語っている。1942年3月~4月、青年の島(当時は松島と言われた)のモデーロ監獄に第二次大戦時の「敵国人として収容」されている。彼は、19歳で出国して以降一度も日本(沖縄も)の地を踏んでいない。また、彼の没後、ドイツ人の妻と子供たちはドイツに移ったという。

今般、『そしてイスラ(島)の土となる~日系キュー



バ移民の記録』(映像監督:鈴木伊織、制作:CUBAPON)というタイトルのドキュメンタリー映画を制作中で年内には出来上がる予定だ。キューバは原住民が死滅し、現在の民族構成はヨーロッパ系25%、混血50%(ムラートと称される)、アフリカ系25%(推定)(日本国外務省2019年12月24日付)といわれる。キューバには末裔まで含め日本人・日系人が2000人ほど在住するが、このドキュメンタリー映画は特に多くの日系人が住むキューバの島=フベントウド島(青年の島)の日系人の記録である。

この島は1978年までピノス島(松島)といわれカストロ兄弟などが収監されたモデーロ監獄があることで有名で、キューバの国民的英雄ホセ・マルティもこの島に軟禁されていたことがある。第二次大戦時、米国の意向を受け「敵国国民」として在キューバの日本人、日系人たちが収監されたところである。

CUBAPONはこの島で日系人たちの生存のための自立を目指し「稲作支援プロジェクト」を実施してきた。それは米国の攻撃に対峙を強いられているキューバ人たちの「尊厳と生存」のためであった。

現在の困窮期にあつて民族差別が顕在化しているとの情報にも触れるが、キューバでは「キューバ人」という概念を「キューバ革命に身を挺した人」と定義している。青年の島に住む日系人らもキューバ人として「尊厳と生存」を掲げるキューバ革命とともにあつた。そこで生き、イスラ(島)の土となる。

シュプレヒコールに代えて



青年の島(フベントウド島)で行われている日本祭りでは、日系人の二世から四世たちが着物を着て先祖の出身地ののぼりを持って参加する。想いははるか。